

共稼ぎ労働文化のなかの女性と家族  
—織物産地の事例分析—

木本喜美子（一橋大学名誉教授）

## 1. 課題意識

本報告の目的は、福井県の織物産地（勝山市）において、高度成長期をはさむ時期に織物業に就業した女性と教員となった女性に注目し、両者の社会階層差を念頭におきながら、地域の労働文化と家族のなかでの継続的就業女性の自己決定権の模索過程を、ライフヒストリー分析から検討することにある。報告者を研究代表者とする共同研究チームは、女性労働史の研究課題を、「女性はどこでどのように働いてきたのか」を実証的に捉えることにあると考え、地域産業にまでおりて女性と職場、そして家族との連関構造を把握する調査研究を重ねてきた。織物産地に着目したのは、戦前期から女性労働者、とりわけ既婚女性労働者の働きに依存した地域であり、戦後期に至るも、わけても高度成長期以降もこうした体制が基本的に変わることがなかったからである。まずは当該地域で織物業に従事した女性労働者の継続就業を可能とした家族的諸条件および家族内諸関係を明らかにする調査を展開し、その成果を、木本編著『家族・地域のなかの女性と労働—共稼ぎ労働文化のもとで—』（明石書店、2018年）として刊行した。次いで2018年から、同一地域内で共稼ぎ家族を実践してきた女性教員を調査対象に加えて、織物業女性との比較研究に着手した。両者の学歴差に端的にあらわれている出身家族の社会階層差を踏まえつつ、地域内における共稼ぎ家族としてのあり方にみる同質性と差異を明らかにすることによって、地域内の共稼ぎ家族規範を把握することを目指した。

ただしコロナ禍の時期に入ってしまったために、高齢年齢層に属する元女性教員へのインタビュー調査は困難を極めた。女性教員のサンプル数が少ないことを自覚しながらも、インテンシブな聞き取り調査内容を生かすかたちで、日本家族社会学大会（2020年9月）で報告し、「ふたつの継続的就労女性像と働く意味—織物産地の経験をもとに—」（『家族社会学研究』第33巻第2号、2021年10月）をまとめた。この段階では元女性教員は10ケースに留まっていたが、科研費プロジェクトが終了した2022年度末には21ケースとなった。本報告は、女性教員の事例の全体を含み込んであらためて分析しなおすことによって、織物業女性との比較研究の総括を行うことを意図している。

## 2. 方法的視角

そこで第一に重視すべきだと考えるのは、既婚女性自身による働くことに対する意味づけである。そのために労働—生活を包含するライフヒストリー分析によって、彼女たちの家族内地位とそれをとりまく家族内諸関係を重視し、同時に家族的諸要因が職場での働き方にどのような影響をもたらすかについても目配りしながら、職場と家族を行き来してきた既婚女性が、自己の働く意味をどのように見出していたのかを考察する。織物業女性においては、三世代家族を構成した「嫁」の立場にあった事例と、新婚期から夫婦二人で生活をスタートさせた立場にあった事例との間には大きな差異が見られることが明らかとなっている。女性教員については、三世代家族の「嫁」の場合には、織物業女性とまったく同様に、自己の稼得賃金に対する決定権を持つことができない事例もみられたが、自分の手にその権限を取り戻す事例もあった。事例全体を詳細に分析したときに、この点をめぐって、そしてそれを通じて自ら働くことをいかに意味づけていたかについて導き出しうる結論が、本報告の焦点のひとつとなる。

第二の課題としては、元女性教員の職業生活に分け入ることによって、共稼ぎの実践者である彼女たちがいかなる教育実践者として立ち現れたのかを把握することである。古い時代から学校は、男性中心的な慣行や価値観があり、女性差別的な処遇が存在してきたが、女性教員はそのことを自覚しながら自らの教育実践を位置づけていたと思われる。インタビュー調査においては、女子生徒への働きかけや性教育、そして生活教育への取り組みなどが語られていた。彼女たちの職業生活の場での教育実践に関する分析を取り込むことによって、女性教員が、家族および職場で自己決定権をいかに模索したのか、考えたい。

（キーワード：継続的就業女性、共稼ぎ労働文化、高度成長期）